

横浜市小学校社会科研究会 3学年部会 研修会記録		令和7年2月12日 横浜市小学校教育研究会 会長 沼田 留美子 横浜市小学校社会科研究会 会長 高畠 聡 同 学年部長 栗田 一輝
【提案日時】 12月 4日（水）	提案 竹永 記士先生（豊岡小） 松本 芽依 先生（都岡小）	
【会 場】 横浜市立豊岡小学校 横浜市立都岡小学校	司会 田川 晋啓先生（山元小） 白井 亮先生（洋光台第四小） 記録 広中 幹久先生（東俣野小） 戸川 真理子先生（稲荷台小）	
1 提案内容 豊岡小学校会場 提案者 竹永 記士先生 単元名「はたらく人とわたしたちの暮らし～地域おいしい食材を！スーパーKの秘密～」		
2 提案者より 学習問題は、6000円のいくらをどうして売っているのかであった。検討会では、2つの異なる値段のいくらを同時に提示するのがよいという意見をいただいたが、児童の思考や発言がひろがりすぎたり、散らばりすぎたりしてしまい、話し合いにみんなが参加しにくくなってしまうのではないかと考え、まずは、6000円のいくらについて詳しく考えることにした。 児童の考えを事前に把握しておき意図的に指名するようにした。振り返りを書くことが難しい児童にはボイスレコーダーなどを使って振り返りを行ったり、学習問題に対して考えることが難しい場合は家の人と相談して考えたりできるようにした。		
3 協議会 <質疑応答> ・本時でいくらに注目したのはなぜか。→子どもが好きなお寿司のネタの一つであったから。 ・いくら以外にも注目を集められるものはあったのか。→タラバガニ		
視点1 子どもが自ら問いを見だし、主体的に学び続けることができる単元づくり ・子どもの反応がとてもよかった。自分の意見を言いやすい雰囲気であった。地域の商店街や飲食店が掲載されている地図や、スーパーKで実際に買い物をした人にインタビューした内容を取り上げてよかった。 ・事前の準備や取材がよくされていた。グループでの話し合いでは思いをもって考えられるようにしていた。話し合いの際にはロイロノートの共有ノートを使用し、考え別で色分けしていくやり方もあるのではないかと。 ・売り上げを高めるくふうなどキーワードがわかるように板書をくふうする必要がある。スーパーKについての取材がとてもよかった。自分ごととして考えられるようにしていた。お客様の願いに応えることがお店にとってどのようないいことがあるか考えるとお店の売り上げや利益についてつながる。		
視点2 個を生かし、協働的に学びを深めることができる授業づくり ・地域の人たちの売り上げを高めるための視点が必要だった。6000円のいくらと安いいくら、値段の異なるいくらを売っているという売り上げを高めるためのくふうに気付かせたかった。6000円のいくらがたった2個しか売れないという事実を児童がどのように捉えているのかについて問い返しなどをしていきかけた。あるいは、2個も売れたという見方もあったかもしれない。		

- ・子どもたちの考えをもって授業に取り組んでいる。それぞれの買いたい人のニーズが売り上げにつながることをおさえられるようにしたい。本時で子どもたちが売り上げにつながる発言がところどころにあった。
- ・カードに自分の考えを書き込んでおり、子どもの字で黒板に考えが貼られており安心感をもって授業に臨めていた。一方で深い意見が出ていないため、カードに意見を書く以外にもどのような手立てがあるのか検討の余地があるかもしれない。

<講師の先生より>

平沼小学校 校長 寺岡 徹 先生

地域に密着したスーパーKを取り上げたこと自体はとても価値があった。そのことが、子どもたちの意欲的な追究活動につながっていた。

本時では、高いいくらを「ほしい」という人がいると考えた児童を意図的にあてたことで、販売の話に舵をきったが、高いいくらが月8個しか売っていないことを考えられるようにして、店舗側がどのように売り上げを高めようと工夫しているのかについて話をつなげていけるとよりよかった。まとめのときに今までの学習を振り返り、いろいろな人のニーズに合わせていることに気付かせたかった。3年生の発達段階として、1時間の学習を無理にまとめる必要はないので、どの事実を子どもたちに注目してほしいのかを明確にしていきたい。

教職員育成課 小西 俊光 先生

児童の思考から学習の流れを考えていってほしい。大人が面白いと感じることと子どもが面白いと感じることは違うので、子どもがどのようなことに興味をもっているのかについてのみとりが大切になる。他のスーパーにはお家の人がよく行く理由があり、駐車場がある、セルフレジがあるなどの様々な理由をおさえたい。スーパーKでは、肉が他のスーパーでは売っていない部位を売っていたり、日用品は売っていなかったり、お菓子の種類は少なかったり、大きなメーカーからお菓子を仕入れていなかったりするなど、もの珍しいものを売っていることからなぜこうなのか、問題意識をもたせられるとよい。

また、ポップにも力を入れているようである。大人の面白いと子どもの面白いをしっかりと分けながら、教材を捉えることが大切である。

1 提案内容

都岡小学校会場 松本 芽依 先生

単元名「地域の安全を守る～火災から都岡のまちを守る人々の思い～」

2 提案者より自評

視点1 子どもが自ら問いを見だし、主体的に学び続けることができる単元づくり

都岡の消防士が、都岡のまちを守ることが、他のまちを守ることに繋がり、横浜市全体を守ることに繋がることに気付かせたかった。子どもの発言を受けて、用意した資料を提示しようか悩んだが、情報過多になると思い、出さなかった。

視点2 個を生かし、協働的に学びを深めることができる授業づくり

子ども達は消防士への尊敬の念が強く、授業以外の場でも都岡の消防について話していた。そのことを授業の中で伝えただったため、学習問題と子ども達の発言にずれが生じてしまった。授業の終末では、「まちを守る」という視点から、他の組織との連携に繋がるような流れになった。消防士がいない時はどうするかという視点から、消防団に繋がりたい。

3 協議会

視点1 子どもが自ら問いを見だし、主体的に学び続けることができる単元づくり

- ・挙手の多さから、子ども達が学習問題に対してよく考えていることがよく分かった。全体で振り返りの時間を設けたことで、前回までの学習や、前単元とのつながりを考えて発言している子も見られた。
- ・話し合いでは学習問題に迫る発言をしていたが、振り返りでは消防士の使命がカッコいいという

方向に向いてしまった。教師の問い返して、本時の学習問題にもっと迫ることができたかもしれない。

- ・自分たちのまちを主軸に考えていたので、「他のまち」の消火に行くことについて取り上げた時、自分事として薄れてしまったように感じた。
- ・車両の数や出火件数など、具体的な数を示した資料が、理解を深める手助けとなった。
- ・教師の発言で子ども達の中で学習問題が生まれるような問い返しがあってもよかった。
- ・本気の学習問題までの流れや内容が子ども達の思考に合っていた。
- ・教師のフィールドワークによる教材研究が素晴らしかった。
- ・実際に見学したことが、資料の内容とつながる発言が見られた。

視点2 個を生かし、協働的に学びを深めることができる授業づくり

- ・今までの学習の資料やまとめた掲示物が思考を促すツールになっていた。
- ・授業内の発言で教師対児童が多かった。子ども同士で話をつなげたり、学びを深めたりするためにペア活動を取り入れる方法もあったのではないかな。
- ・振り返りの蓄積が協働的な学びにつながったと思う。
- ・子どもが書いた振り返りに教師の子どもの考えを価値づけたり、思考を促したりするコメントがびっしり書いてあった。教師の価値付けが子ども達の意欲につながった。
- ・資料が多く、情報過多になっていた。資料や掲示物の精選を行うと、子どもの思考が焦点化しやすくなる。
- ・資料に基づかない発言（推測）を事実と照らし合わせる機会があると、子ども達の学びがさらに深まると思う。

<講師の先生より>

関東学院大学 西川 健二先生

子ども達の一生懸命さがよく伝わってきた。まちや地域がすごく好きなのが伝わってきた。分担協力、連携を子どもの言葉でどのように表すのかが重要である。管轄について、横浜市全体を守ることが横浜市消防局の本来の管轄である。しかし、子ども達の中では、自分たちのまち（都岡）だけでなく、どうして他のまちも守らねばならないのかという疑問があり、本来の管轄の意味との間に矛盾が生じていた。この子ども達の疑問から、本来の管轄（横浜市全体を守る）へと認識を変えることが今回の単元で重要な事であった。

子ども達の発言を通して、都岡のまち以外も守っていることに気付き始めていた。「絶対、他のまちには行かない。」という発言を受けて、能登地震の時の横浜市の対応に関する資料を投入することで、子ども達の認識が変わったと考えられる。

連携・分担について、ビルが多いみなとみらい地区ははしご車を出動させることが多く、都岡のまちのような住宅街では通常の消防車両を出動させる点から、連携・分担に目を向けることができた。〇〇になったら〇〇すると「決まっている」という言葉が、社会科の概念である「分担」であると、教師側で繋げ、概念理解を促すとよい。事実を基に概念理解に繋げていくことが大切だ。他にも、子ども達の言葉から、公助、共助、自助へと概念理解に繋げていくと、より理解を促すことができる。

青山学院大学 柳下 則久先生

子ども達は自分のまち以外に出るのは当たり前という認識があるため、なぜ、他のまちに出動するのかという学習問題になったのだろうかと思った。子ども達の思考の中には、「都岡のまちしか助けない。」と思っている。そのため、都岡のまちから横浜市のまち全体のために連携していくという認識に繋げていく必要があった。

授業の展開について、資料提示は、じっくり見て、考え、検討する場と時間が必要であった。そのため、資料提示の精選が必要であった。資料の精選をすれば、振り返りを共有する時間も確保できたと思う。子どもが考えるためのポイントを決めると良かった。蓄積した振り返りやみとりを生かすと子どもが活躍できると思った。授業は仕切るのではなく、仕掛けていくものである。仕掛けたら子どもの言葉を待つ。先生が子どもの発言を反復しながら、先生の言葉に変えていってしまっていたので、子どもの言葉を引き出す発問や促す言葉が必要である

文責 広中 幹久先生（東俣野小） 戸川 真理子先生（稲荷台小）